

# どうする 福祉

縮む日本の処方箋

## 路上生活「だれもがたどりうる道だ」

営利活動法人「エス・エス・エス」(SSS)が東京都新宿区で運営する低額の宿泊所で暮らしている。

元ホームレスの無職、広田健司さん(70)〔仮名〕は、月約13万円の生活保護費を受けながら、NPO法人(特定非

営利活動法人)「エス・エス・エス」(SSS)が東京都新宿区で運営する低額の宿泊所で暮らしている。

団塊の世代(昭和22〜24年生まれ)で、学生運動に参加して山形県に住む父親の怒りを買い、東京の大学を中退した。

法務省入国管理局の職員や呉服メーカーの営業職など、仕事をいくつも変えた。結婚し子供を3人もうけたが、妻とは40歳のとき死別。路上生活を始めてすぐ、連絡先を登録した携帯電話を盗まれたため、独立している子供たちとは連絡をとっていない。

「勤め先の社長とそりが合わず」55歳で会社を辞めた後、相次いで両親が亡くなり、遺産約800万円が手元に入った。以来、定職には就かず、友人宅に転がり込み、パチンコや競馬にのめりこんだ。気付けば遺産は使い果たしていた。

広田さんがホームレスをしていたのは60代前半の3〜4年間。平成26年8月、深夜に

公園のトイレに行こうと立ち上がると、右半身に力が入らない。ホームレスの仲間に救急車を呼んでもらい、病院へ運ばれると脳出血と診断された。大腸がんと甲状腺がんも見つかり、大腸がんは切除できたが、甲状腺がんは手術できないといわれた。医師に「悪性ではないけれど、いずれ声が出なくなる」と告げられた。

2カ月ほどの入院の間に区役所の担当者が来て生活保護の申請をしてくれた。紹介されたのがSSSだ。施設では個室で暮らし、日中は掃除、テレビ鑑賞、読書などして過ごす。1日2食付きで、生活保護費から一定額を施設の利用料として差し引かれてい

る。

厚生労働省の「平成30年度厚生年金保険・国民年金事業の概況」によると、厚生年金の受給額は男性で月あたり平均約16万円だ。広田さんも申請すれば、月あたり10万円以上の年金をもらえた可能性があるが、「職員から申請を促されているが、書類の手続きが面倒くさくて、もらっていない」。

再び働き、自立して暮らす気があるかと問うと、広田さんはこう答えた。

「体が悪いこともあり、その気はない。最後まで今の施設に住みたい」

現役から意識

遺産を手に入れ、キャンブルで使い果たして路上生活へ。SSSの竹浦史展事務局長は「広田さんのように仕事、貯金、年金、家の4つが

なくなれば、高齢者は確実に「生活困窮者」となる。現役時代から意識しなければ、だれもがたどりうる道だ」と指摘する。

第1次ベビーブームで生まれた団塊の世代は令和7(2025)年に全員が75歳以上の後期高齢者となる。政府は少子化で減る働き手を高齢者で補おうとしている。例えば働くこと給付が目減りする在職高齢年金を見直し、高齢者の勤労意欲を刺激する考えだ。

だが、そもそも年をとって体力や意欲が衰えた人に働いてもらうのは容易ではない。広田さんのように結局は生活保護頼みという高齢者は今後ますます増える恐れもある。4人に1人の後期高齢者を抱える5年後への不安が募る。

### 第1部 就労×年金 ④

法務省入国管理局の職員や呉服メーカーの営業職など、仕事をいくつも変えた。結婚し子供を3人もうけたが、妻とは40歳のとき死別。路上生活を始めてすぐ、連絡先を登録した携帯電話を盗まれたため、独立している子供たちとは連絡をとっていない。

「勤め先の社長とそりが合わず」55歳で会社を辞めた後、相次いで両親が亡くなり、遺産約800万円が手元に入った。以来、定職には就かず、友人宅に転がり込み、パチンコや競馬にのめりこんだ。気付けば遺産は使い果たしていた。

広田さんがホームレスをしていたのは60代前半の3〜4年間。平成26年8月、深夜に

公園のトイレに行こうと立ち上がると、右半身に力が入らない。ホームレスの仲間に救急車を呼んでもらい、病院へ運ばれると脳出血と診断された。大腸がんと甲状腺がんも見つかり、大腸がんは切除できたが、甲状腺がんは手術できないといわれた。医師に「悪性ではないけれど、いずれ声が出なくなる」と告げられた。

2カ月ほどの入院の間に区役所の担当者が来て生活保護の申請をしてくれた。紹介されたのがSSSだ。施設では個室で暮らし、日中は掃除、テレビ鑑賞、読書などして過ごす。1日2食付きで、生活保護費から一定額を施設の利用料として差し引かれてい

る。

厚生労働省の「平成30年度厚生年金保険・国民年金事業の概況」によると、厚生年金の受給額は男性で月あたり平均約16万円だ。広田さんも申請すれば、月あたり10万円以上の年金をもらえた可能性があるが、「職員から申請を促されているが、書類の手続きが面倒くさくて、もらっていない」。

再び働き、自立して暮らす気があるかと問うと、広田さんはこう答えた。

「体が悪いこともあり、その気はない。最後まで今の施設に住みたい」

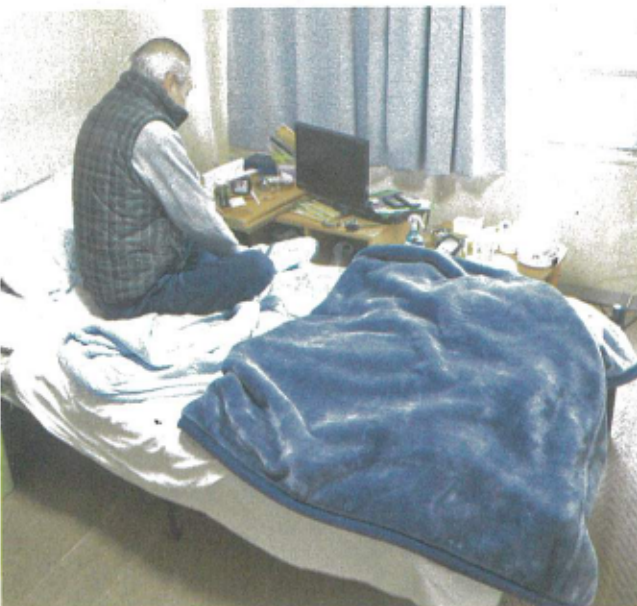
現役から意識

遺産を手に入れ、キャンブルで使い果たして路上生活へ。SSSの竹浦史展事務局長は「広田さんのように仕事、貯金、年金、家の4つが

なくなれば、高齢者は確実に「生活困窮者」となる。現役時代から意識しなければ、だれもがたどりうる道だ」と指摘する。

第1次ベビーブームで生まれた団塊の世代は令和7(2025)年に全員が75歳以上の後期高齢者となる。政府は少子化で減る働き手を高齢者で補おうとしている。例えば働くこと給付が目減りする在職高齢年金を見直し、高齢者の勤労意欲を刺激する考えだ。

だが、そもそも年をとって体力や意欲が衰えた人に働いてもらうのは容易ではない。広田さんのように結局は生活保護頼みという高齢者は今後ますます増える恐れもある。4人に1人の後期高齢者を抱える5年後への不安が募る。



NPO法人が運営する低額の宿泊所で暮らす元ホームレスの無職、広田健司さん(仮名) —東京都内

#### 【生活保護】

国や自治体が経済的に困窮する国民に必要な保護を行い、健康で文化的な最低限度の生活を保障する制度のこと。